

平成30年度 公立小中学校における長期欠席（不登校）の状況等

1 概要（表1・表2・図1・図2参照）

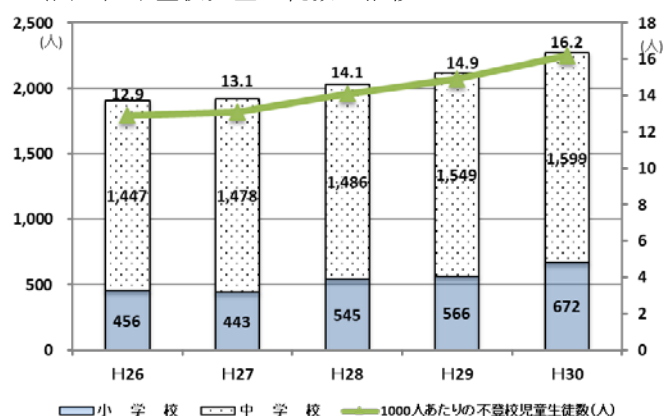
- 平成30年度の公立小中学校における長期欠席児童生徒数は3,195人で、小学校は1,069人、中学校は2,126人。理由別では、「病気」561人、「経済的理由」0人、「不登校」2,271人、「その他」363人。
- 不登校児童生徒数は、平成29年度と比較して156人増加（前年度比7.4%増）。
（小学校672人（前年度比106人増）、中学校1,599人（同50人増））

（表1）理由別長期欠席者の状況

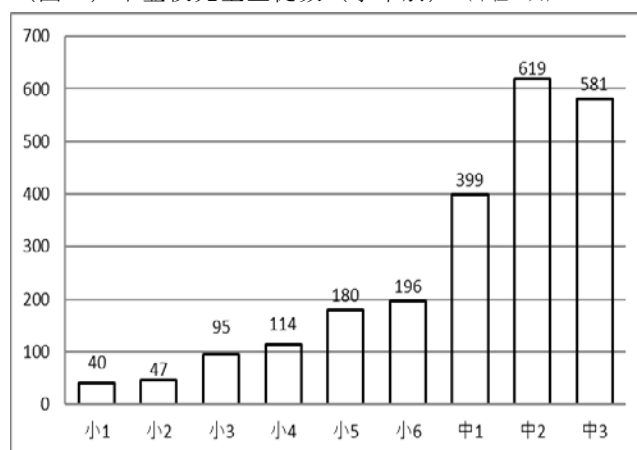
	校種	在籍者数 (人)	理由別長期欠席者数				計 (人)	不登校 出現率 (%)
			病気 (人)	経済的理由 (人)	不登校 (人)	その他 (人)		
H29	小学校	94,466	185	0	566	221	972	0.60%
	中学校	47,650	272	0	1,549	187	2,008	3.25%
	合計	142,116	457	0	2,115	408	2,980	1.49%
H30	小学校	94,036	206	0	672	191	1,069	0.71%
	中学校	45,980	355	0	1,599	172	2,126	3.48%
	合計	140,016	561	0	2,271	363	3,195	1.62%

- 学年別の不登校児童生徒数では、中学2年生の619人が最多。
- 1,000人あたりの不登校児童生徒数は16.2人。（前年度比1.3人増）不登校児童生徒のうち、90日以上欠席している児童生徒数は1,326人で、全体の58.4%。（小学校316人、中学校1,010人）

（図1）不登校児童生徒数の推移



（図2）不登校児童生徒数（学年別）（単位：人）



2 不登校の要因と考えられる状況（複数回答：表3参照）

- 分類別児童生徒数は、小学校で「『不安』の傾向がある」が最多（266人）となり、中学校で「『無気力』の傾向がある」が最多（539人）となった。そのうち最も多い区分は「家庭に係る状況」（小学校132人、中学校287人）。
- 次に多い分類別児童生徒数は、小学校は「『無気力』の傾向がある」（178人）で、中学校は「『不安』の傾向がある」（528人）で、そのうち最も多い区分は、小学校は「家庭に係る状況」（144人）で、中学校は「いじめを除く友人関係をめぐる問題」（229人）。

3 不登校児童生徒への指導結果（複数回答：表4参照）

- 「指導の結果、登校する又は登校できるようになった児童生徒」は、小学校では148人（22.0%）、中学校では353人（22.1%）。

4 相談・指導を受けた専門機関等（複数回答：表5-1・表5-2・表5-3参照）

- 学校内、学校外において、担任以外の専門的な相談・指導を受けている児童生徒の実人数の合計は、小学校498人、中学校1,089人。
- 学校内において、最も多いのは、小中学校ともに「スクールカウンセラー、相談員等による専門的な相談を受けた」（小学校227人、中学校478人）。
- 学校外において、最も多いのは、小中学校ともに「教育支援センター（適応指導教室）」（小学校117人、中学校311人）。